

もりおか復興応援フリーマガジン

# Stitch

[ステッチ]

TAKE  
FREE

vol.19  
2016.3.11

発行／盛岡市

「想い」は続く。  
カタチを変えても。

[特集]

これからも、  
このまちで生きていく。

インタビュー

さかなケン

〈国立大学法人 東京海洋大学名誉博士・客員准教授〉

「想い」は続く。  
カタチを変えても。

何ができるか、を考えていた  
何もできない、と立ち尽くした  
伝え続けた4年半  
届けることはできただろうか  
誰かの力になれただろうか

正解なんてわからない  
それでも前を向くのだと  
その姿を伝えてほしいと  
背中を押されたのは、私たちの方だった

刻々と変わっていく海のまちで  
今日も誰かが暮らしている  
描く未来はまだ先 果てしない道の途中



もりおか復興応援フリーマガジン

# Stitch<sup>[ステッチ]</sup>

vol.19 2016.3.11

02 「想い」は続く。カタチを変えても。

[特集]

04 **これからも、  
このまちで生きていく。**

12 Stitch座談会 復興とまちづくり

18 三陸うまいもん紀行 がんばるすし屋 編

20 19冊のStitchを振り返る

インタビュー

22 **さかなクン**  
(国立大学法人 東京海洋大学名誉博士・客員准教授)

26 **盛岡から支援を届けて**  
~つないできた5年間~

28 Re:Stitch ~読者のみなさんから~

30 みんなの3.11

31 プレゼント

発行日/2016年3月11日

企画・編集/株式会社ラデオもりおか

〒020-0871 盛岡市中/橋通1-1-21

TEL.019-621-7110 FAX.019-621-7153

デザイン/冬部幸治(創造集団 志庵)

印刷/山口北州印刷株式会社

Special Thanks 取材・制作にご協力いただいた皆様

※取材、撮影、制作など本誌作成にご協力いただいた皆様に  
厚く御礼申し上げます。

※掲載されている情報は平成28年3月1日現在のものです。発  
行後の情報変更につきましてはご容赦ください。

※このフリーマガジンは、盛岡市の復興推進広報事業によって  
発行されています。

※無断転載禁止

次々に生まれる新しいニュースで  
上書きしてしまわないで  
あの時感じた悲しみ 心からの祈りを  
時々でいい、思い出して

「想うこと」を続けよう  
カタチを変えても、これからも



Facebookでも  
情報を発信中!



# CASE 1

## 大学生から代表取締役へ 「せんべい」で切り拓いた未来

菅野泰葉さん

(株式会社「松商店」代表取締役)

震災が起きたとき、菅野さんは宮城大学の4年生だった。卒業と就職を直前に控えていたあの日、大きな揺れが東日本を襲った。当時暮らしていた仙台市北部の震度は6弱。停電と余震が続くなか、大学に避難し夜を明かした。

陸前高田の実家で暮らす母とは、地震の直後に携帯電話で話をした。だから心配はしなかった。翌朝、ラジオで「陸前高田の市街地が壊滅的」という言葉を聞くまでは。

「すぐに公衆電話に走りました。何回もかけたけど、固定電話も携帯電話もつながらない。実家は海のわりと近くなので、だめかもしれない、と思いました」

# これからも、 このまちで生きていく。

礎を築き、道を拓く。

大切なふるさとの未来のために。



取材した日は、おかきづくりの作業が行われていた。油でカラッと揚げたあと、塩やコーンポタージュ、わさびマヨネーズなどのフレーバーで味付けする。

石巻で仕事をしていた父は、知人を通じてすぐに無事を知らせてくれた。関東に住む兄を経由して母の無事を知ったのは、震災の3日後だった。

陸前高田に里帰りしたのは4月初旬。被災をまぬがれた実家に電気が復旧したことや、就職先の入社式が4月中旬以降に延期されたこともあり、同じく仙台で暮らしている妹と一緒に、迎えに来た父親の車でふるさとへ向かった。

「新聞やニュースで見る陸前高田の風景は、どこか人ごとのように感じていました。目の前に現れたまちを見てはじめて『壊滅的』という言葉を実感し、衝撃を受けました」

変わり果てたまちで数日を過ごすうち、「里帰り」のつもりだった心が変化していった。「父は仕事のため石巻に戻らなければならず、兄は関東。私や妹までいなくなったら、母はまた1人になってしまう。母のそばにいてあげたい、地元のためにもここで何かできないか、という気持ちが生まれま

した」。菅野さんは内定を辞退し、陸前高田に戻ることを決意した。

「せんべいを、陸前高田の名物にしたらどうだろう」

そんな言葉を聞いたのは、震災から2ヶ月経った5月のことだった。「兄の友人で、草加せんべいで有名な埼玉県草加市出身の人がいて。小さいときから、あちこちの店先でせんべいを焼く姿を見ていたこともあり『せんべいなら焼き機一台あれば商売ができる』って言っていたそうなんです」

やっと仕事が決まったばかりだった菅野さんは「ふーん、という感じで聞き流していた。単発のイベントでならやってみようかな、というレベル」と振り返る。しかし、兄の友人が見つないでくれた「草加せんべい振興協議会」との縁をきっかけに、8月下旬の復興イベントで焼きせんべいを販売したことからは、ある思いが芽生えた。

「ボランティアで陸前高田に来ている人たちが、お土産にとせんべいを買ってくれるのをみて思っただんです。

今の陸前高田には『名物』と呼べるものがあまりないし、働きたくても仕事がない、という人がたくさんいる。せんべいの会社を設立したら、少しでも働く場を提供できるのでは、と」

このイベントのために、草加せんべい振興協議会は職人を陸前高田に派遣し、およそ3週間かけて技術を伝授していた。「160年もの間外に出すことのなかった草加せんべいの技を、陸前高田まで来て教えてくれた。これって本当にすごいこと。反対もあつたと思いますが、復興を願って協力してくれた協議会のみなさんに、せんべいを陸前高田の名物に育て上げることで恩返ししたいとも思いました」

大学を出たばかりで、社会人経験もゼロに等しい菅野さんの決意を、家族は応援してくれた。会社設立の手続きや挨拶まわり、ビジネスのマナーやノウハウは、国内外で事業を手がけている兄から手ほどきを受けた。

「仕事のときの兄はすごく怖いんです(笑)。何回も泣かされましたが、身

びいきせずに厳しく接してくれたから、今があると思っています」

こうして2012年1月4日、菅野さんは「株式会社陸前高田焼きせんべい」を設立。その後、せんべい以外の商品もラインナップに加わったことから、「二松商店」と社名を変更した。

会社を立ち上げてから4年が過ぎ、現在のスタッフは菅野さんを含め



仕事と子育ての両立に奮闘中。「パソコンで作業をしている間、子どもは足元で遊んでいます。電話中に泣き出して焦ってしまうことも」と菅野さん。



本場・草加から届けられるせんべいの生地をホイロ\*し、一枚ずつ手焼き。地元・八木澤商店の醤油で仕上げるせんべいは、醤油、ごま、青のり、海苔の4種類。「若い世代を意識した」というおかきは、塩、コーンポタージュ、わさびマヨネーズ、しょうゆのフレーバーが揃う。ネットでも購入できる。

<http://www.rikuzentakata-senbei.com/>

\*生地を調整すること。気温や湿度に左右されるため、とても繊細で難しい作業のひとつ。

て7人。一枚一枚でいねいに手焼きする4種類のせんべいのほか、「せんべいをあまり食べない子どもや若い世代にも気軽に食べてほしい」と、4つのフレーバーの揚げおかきもラインナップに加えた。岩手県内のスーパなどに卸しているほか、イベント出店で首都圏に出かけることもある。

「首都圏のイベントで販売をしたとき『お土産でもらっておいしかったか』と声をかけてくれた方がいて、うれしかった。うちのおせんべいを気に入ってくれた人が、もっと気軽に買に行けるよう、販路を拡大していきたい」と話す菅野さん。一方で、遠方から訪れる人が少なくなったなど「震災の風化」も実感している。

「会社を立ち上げたときは、おしいせんべいを『作る』ことに必死でした。時間が経つにつれ、今度は『続ける』ことの大変さも感じます。風化だったり、お客さんが商品に飽きてきたり。だから新しい商品を開発していくことも今の目標です」

プライベートでも大きな変化があった。2013年に地元の男性と結婚、去年の3月には子どもが生まれた。社長業と家庭との両立は楽ではないが「家族のサポートが心強い」と菅野さん。家族が増えたことで、仕事や自分の立場に対する意識も変わってきたと話す。

「従業員だけでなく、彼らの家族も守っていかなければ、という自覚を強く持つようになりました。子どもにもうちのせんべいを食べて育ててほしいから、会社がずっと続いているように、努力していきたい」そのためにも「陸前高田のファンをもっと増やしていかなければ」と考えている。

「震災前、夏になると高田松原が海水浴客でにぎわっていた頃のように、まちを訪れる人を増やしたい。おしいものを食べて、お土産にはうちのおせんべいを買ってもらって（笑）。同じ思いを持つ人たちが、いろんな人を巻き込んで、陸前高田の魅力を発信することにも貢献していきたいです」

## 県内初の「本設」商店会 5年越しの希望と覚悟

葛西祥也さん

(三陸サイコー商店会協同組合理事長)

2015年7月12日、大船渡市三陸町の越喜来地区は、大勢の人でにぎわっていた。

ライブや郷土芸能、遊具コーナーにご当地ヒーローの握手会、おいしそうな屋台。「大々的なイベントを自分たちでやるのは初めて。準備も大変だったし、何より『みんな来てくれるかな』とドキドキしていた」と振り返るのは、理髪店「ヘアサロンカサイ」のオーナー葛西祥也さん。三陸サイコー商店会協同組合の理事長も務めている。

「三陸サイコー復興祭」と名付けたこのイベントは、仮設から本設へと移転した「三陸サイコー商店会」のお披露目として行われた。岩手県では第一号となる本設商店街。その船出を、800人もの来場者が祝った。「田舎に

も、あんなに人が来るなんて」と、葛西さんは楽しそうに笑った。

越喜来湾の突き当たり市街地が広がっていた越喜来地区。東日本大震災では最大16・9メートルの津波に襲われ、壊滅的な被害を受けた。死者・行方不明者は大船渡市内で2番目に多い96名。家屋321棟が被災し、その8割以上が全壊だった。商店も36店舗のうち34店舗が被災。葛西さんが営んでいた理髪店兼住居も、例外ではなかった。

あの日、大きな地震が起きてすぐ、葛西さんは消防団員として任務にあっていた。団員の多くは近隣の地域に働きに出ているため、平日地元にいるのは葛西さんともうひとりだけ。ふたりで水門を閉めに行つたときに第一波が押し寄せ、その勢いに「ただごとじゃない」と察した。すぐに高台に移動し、住民を避難誘導しているとき、津波が市街地を飲み込むのを見た。

翌日から避難所に身を寄せ、消防団員として行方不明者の捜索にあ



「越喜来地区はかさ上げがなかったから、本設にできました。それでも5年。すごく長く感じました。まだかさ上げの途中で、さらに待たなければならぬ地域の方々は、本当に大変だと思う」と葛西さん。





商店会が集会所として作った「みんな館」の前で、集まってくれた店主と(右から2番目が葛西さん)。今後は店主を講師にしたカルチャー教室なども開催していく予定。お店の人とまちの人の接点が生まれる機会にも、と期待する。

たった。父親も行方不明者のひとりだった。日が経つにつれ、ほかの団員は徐々に仕事に戻っていく。店も家も、父親も失った自分は何をするべきなのか。そんなとき、父親の友人が「事務所の2階が空いているから、店をやったら」と声をかけてくれた。

こうして震災からおよそ1ヶ月後に理髪店を再開。まだ電気も復旧しないうなかでの再出発だった。「理容組合を通じて、全国から道具や義援金など、多くの支援をいただきました。『空き店舗があるから、こっちに來て店をやらないか』と言ってくださった人もいました」と葛西さんは振り返る。

「でもやっぱり……」こを離れられない。生まれ育った越喜來で、父親から受け継いだ店を再開しなかった

それから数ヶ月後。仮設住宅への入居が一段落し、今度は仮設店舗建設に向けた動きが始まった。越喜來地区でも手を挙げた10店舗で「浦浜サイコー商店会」を発足。2012年2月にグランドオープンを迎えた。

「被災した越喜來地区の店舗は計34。そのうち営業再開したのは浦浜サイコー商店会を含め17店舗です。残りは店をたたんでしまいました」

それをさびしく思いながらも「仮設で5年、10年頑張つて、本設への準備を整えていこう」と考えていた葛西さんたち。しかしその年の秋、予想しなかった困難が降りかかった。復興工事で商店会が建っている場所に県道を通すことが決まり、立ち退きをしなければならなくなったのだ。

なんとかしなければ、と情報を集めた葛西さんたちは、再建資金に使える「グループ補助金」という支援があることを知った。県や商工会議所の協力を得ながら申請書を提出。無事に補助金の認可がおりた。申請にあたり2店舗が廃業を決断、1店舗が新たに加わり、9店舗でのスタートとなった。

補助金で本設への費用が全額まかなえるわけではない。土地の確保、資材費の高騰、消費税率も上がり、持ち

出しの金額は想定以上に大きくなった。また、本設で店を構えることは、改めて「ここで生きていく」覚悟を決めた、ということでもある。これからの越喜來地区はどうなっていくのか。人口が減り続けるなか、商売をして



復興工事が進む越喜來地区。まちの姿は刻々と変わっていく。

いけるのか。多くの人は自宅も流されているため、家も再建しなければならぬ。

「不安が全くないとは言えません。

それでも、とにかく一生懸命商いをしよう、とみんな話しました。店主の多くは昔からここで商売をしてきた店の2代目や3代目ですから。受け継いだものを守っていこう、と」

本設での再出発にあたり、商店会の名前を「浦浜」から「三陸」に変えた。

「三陸サイコー商店会」は2015年7月12日、福祉施設跡地にグランドオープン。周囲には大船渡市三陸支所や診療所などがあり、すぐ後ろには災害公営住宅も完成。店舗のほか、集会所として使える「みんな館」を設け、ここで地域の行事や会合、商店主を講師にしたワークショップなどを行えるようにした。「小さな商店会だけど、ここが地域の核だという気持ちでがんばりたい」と葛西さんは抱負を語る。

商店会に足を運んでもらうよう、

また支援をしてくれた人たちに元気な姿を届けられるよう、イベントの開催やフェイスブックなどでの情報発信にも力を入れている。

「1軒の店ではできないが、商店会としてならできることもある。震災前はバラバラで、顔は知っていても何かを一緒にしたりすることはなかった。でも今はスクラムを組んでいるという実感があります」と葛西さん。今は復興工事関係者がお店に来てくれるので忙しいが、数年後には工事が完了する。この地域でどんな役割を担っているのか、自分たちで考え、行動しなければと話す。

「たとえば南隣にある甫嶺<sup>ほりね</sup>地域には商店が一軒もなく、スーパーが宅配サービスを、私も出張床屋をしています。そうしたニーズにも応えていくことが、地域に根ざし商いをする私たちの役割。高台に家を建てる人が増え、まちの生活スタイルも変わりました。だからこそ、商店会に人を呼ぶ工夫をし続けることが大事だと思います」

越喜来地区の事業者9者で構成される「三陸サイコー商店会」。「支援をしてくれた全国の方々に、元気な姿を伝えたい」と、フェイスブックでも情報を発信中。商店会の日々のこと、イベントの情報などを綴っている。

<https://www.facebook.com/sanriku.saikoo/>





## 臂 徹

まちづくり会社  
「キャッセン大船渡」  
タウンマネージャー

## 達増拓也

岩手県知事

## 下向理奈

NPO法人  
「のんのりのだ物語」  
代表理事

**Stitch** ● 臂さんは大船渡のまちづくり会社のタウンマネージャーとして、下向さんは野田村のNPOの代表としてまちづくりに関わっています。それぞれの活動を通してまちの風景や人の意識などの変化を感じますか。

**臂さん** (以下H) ● 「5年」という節目を、肯定的にも否定的にも意識している方は多いと思います。平時、何事もないときは、まちづくりに対する不満はあまり出てこなかったりしますが、震災をきっかけにいろんな課題が目につくようになり、今はその「受忍限度」を超えたところでみなさん生活しているんだなと感じます。

**下向さん** (以下S) ● 野田村では災害危険区域に約19ヘクタールの都市公園の整備が行われていたり、高台に住宅が完成しつつあったり、被災地の中では比較的速やかに復興が進んでいると思います。今年4月には仮設から高台に移転するんですが、意外と楽しみにしている人も多いなという印象です。

**Stitch** ● それらの変化を踏まえた課題

# 復興とまちづくり

震災から5年。

まちづくりや地域振興に最前線で取り組むふたりの「ワカモノ」と、復興への道を見据え続ける達増知事との座談会を企画。

それぞれが思う被災地の変化、現在の課題などについて語ってもらいました。



臂徹さん [ひじ・とおる]

群馬県出身。震災後、勤めていた建設コンサル会社からの出向で大槌町入りし、調査事業を担当。事業終了後退職し「おらが大槌夢広場」の事務局長に就任。その後も岩手を拠点に、まちづくりをはじめとする復興支援活動に関わる。現在は2015年11月に設立されたまちづくり会社「キャッセン大船渡」のタウンマネージャーとして活動中。



下向理奈さん [しもむかい・りな]

野田村出身。進学のため村を離れ、東京で就職。震災をきっかけにUターンした。役場の臨時職員を経て、2015年1月にNPO法人「のんのりのだ物語」を設立し代表理事に就任。県内外に野田村の魅力を発信する交流事業、地域活性化事業に取り組む。今年4月には、野田村の自然、歴史、文化、人などの魅力を体験しながら学ぶ「野田村大学」を開学。

[http://blog.livedoor.jp/nonnori\\_story/](http://blog.livedoor.jp/nonnori_story/)

はありますか？

**H** ● 不平不満の高まりは「まちづくりへの関心が高まっている」ことでもあるので、その意識を大船渡の未来を切り拓く力につなげたいです。一方で、受忍限度を超えて「どうせ無駄だ」といった諦めや虚無感につながってしまっているいけない、とも考えます。

**S** ● 1日、1週間、1ヶ月と、どんどんまちもコミュニティも変わって行くので、その変化に伴って生まれるニーズに「即座に、柔軟に」対応できる人材がもっと欲しいな、と感じています。

**Stitch** ● 知事は被災地の変化をどう感じていますか。また、おふたりのように岩手で活躍する「ワカモノ」の存在をどう感じていますか。

**達増知事** (以下 **T**) ● 水産業で養殖施設を直す、お祭りを復活させるなどの「復活させる変化」と、新しい会社を興す、NPOを立ち上げるといった「今までなかったことをする変化」という2種類の変化を感じていますし、そんな被災地で若い世代が大活躍しているの

も印象的です。興味深いデータ<sup>※</sup>があって、平成25年から27年までの3年間で、沿岸12市町村の20歳〜24歳の年齢の人口は20%増えているんです。

**全責** ●へえ、そうなんですな！

**I** ●陸前高田では62・7%も増えていて、この年齢層に限れば震災前の人口に戻っています。震災で大きく減った被災地の人口はさらに減るだろう、と多くの人が予測していました。しかし若い世代にフォーカスすれば劇的に回復している。この「ワカモノパワー」が復興の大きな支えになっていると思います。

**Stitch** ●希望の象徴のように活躍する若い世代がいる一方、今も前を向く事が難しかったり、精神的、経済的に困難を抱えている人もいますね。そんな人々へのサポートはどう考えますか。

**H** ●全体を見るのではなく、一人ひとりの境遇を慮り、コミュニティのなかできめ細かく対応していくことがさらに必要になっていくと思います。世の中が「5年という節目を迎えるのだから、そ

世の中が「そろそろ前を向こう」というムードになっているとしても、それができない人を受容する空気を大切にしていけるべき。



そろ前を向こう」というムードになっているとしても、それができない人を受容する空気を大切にしていけるべき。それが本当に一番必要なことだと感じます。

**S** ●精神的につらい、前を向けなという人を無理矢理引つ張るのではなく、半歩でもいいから踏み出そうと思ったときのために、地面を整えておく。私を含め、「前向きになることができている」人たちはそういう役割もしていけるべきなのかなと思います。経済的に悩んでいる方々については、民間ではどうにもできないこともあり、行政のほうで親身になってきちんと調査をして、対策をたててほしいと思います。私たちは内職をつくるとか、村民の人たちのニーズを細かく引き出す柔軟性はあると思うので、そういう部分でそのお手伝いができればと。

**I** ●仮設住宅生活が長期化していますし、また災害公営住宅に移っても、慣れない都市型の集合住宅だったり、状況に合わせた支えはまだ必要だと感じています。日本は高度福祉国家で、

苦しい環境にある方々に向けた支援はいろいろありますので、ぜひ自分の課題にあったものを活用してほしいです。復興関連の支援はかなり幅広いメニューがあり、それゆえにわかりにくい部分もあります……。まずは心や身体を癒すことが必要な人、これから一歩を踏み出そうとする人、それぞれに必要なニーズを適切な支援や制度へとつなぐということを今後もしていきたい。

**H** ●被災地には創発的で新しいことに取り組む人や組織もたくさんある。それぞれ考えや立場があるなかでいろんなことを思ったり、言われたりもするかもしれないけれど、時には鈍感力を働かせながら取り組んでいくことが求められるかと。お互いの信念や取り組みを容認することをしていかなないと、疲弊し合うだけに思えるので。

**Stitch** ●臂さん、下向さんのおふたりは、知事や県に対して期待したいこと、要望などはありますか？

**H** ●5年が経ち、国全体の復興予算が制限されていくなか「適したところ

前を向けないという人が、半歩でもいいから踏み出そうと思ったときのために、地面を整えておくのも私たちの役割なのかな。



適した予算を」という優等生的回答も考えましたが……。正直、「適正とは何か」というのがよくわからなくなっている気がします。私を含め、自分が関わる地域や分野を「どこよりも課題を抱えている」「一番に優先的に支援されるべきだ」と信じきってしまうことで、予算を食い合う（競争する）現象がこのまま続いていくといいのか、と。もつと広域的、総合的な視野で課題を認識して、市町村や道府県の枠を超えて日本の将来を考えるようになりたいし、知事にも一緒に考えていただきたいです。

**S** ●私は、久慈広域の地域復興に取り組む女性グループ「北三陸じえし（女子）会」のメンバーとしても活動しています。じえし会の活動を通じて、同じ地域に住んでいながら知り合うことがなかった人たちとつながることができたり、県が若者や女性の活動をバックアップしようという姿勢を感じるなど、うれしい発見がありました。一方で「このサポートって、今だけなのかな」という不安も。私たちよりさらに若い

世代が活動を受け継ごうとしてくれたとき、サポートが何も無かったら続けていけないのではと。ぜひ長い目でバックアップしてほしいです。

**Stitch** ● 知事が考える「岩手のこれから」と、取り組みまなければならない課題とは？

**I** ● 今後、被災地から「復興地」となった岩手、沿岸地方は、世界でも有数の魅力ある地域としてよみがえります。高度な安全性を備え、復興道路や三陸鉄道、港湾の整備などのインフラも発展し、岩手の経済、社会活動を沿岸が引く張る、ということも増えていく。特に復興道路の完成によって、今まで峠越えをしなければならなかった地域間の移動が格段に便利になり、歴史上初めて沿岸がつながります。市町村を超えた「オール三陸」という単位で、広域的で発展的なビジョンを描き、実現するということを県がしっかりとリードしていきたい。また、学校や地域など狭いコミュニティに分断されがちな若者・女性の横断的、広域的なネットワークづ



若い世代をサポートしながら、それぞれの世代がひとつになって未来へと進んでいく。そういう意識が大切だと思っています。

くりや、その活動を発展させる場づくりも引き続きサポートしていきたいと思っています。

**H** ● 以前知事が、県施策や事業を考えるとときには「大いわて」という大きな人格を仮想し、『大いわて』ならばどう判断するかを意識している、と話していたのがとても印象に残っています。経験、知見を積み重ねた「大いわてさん」がさらに成長していくことを期待しています。

**I** ● 地域に根ざし、そこに住む人たちのことをきちんと見つめながら活動しているおふたりを大変頼もしく思いますし、その力が今後岩手・沿岸が復興していくための大きな支えになるのだと感じます。私は、人類は常に進歩していると思っています、つまり後に続く世代のほうが優秀・有能であるはずだと期待しているんですね。そういう部分もあり、若者への支援は引き続きしていきたい、と思っています。北三陸を舞台にしたNHKのドラマ「あまちゃん」で、主人公アキの背中を、祖母の夏ばっ



ばが押し海に飛び込ませる、というシーンがありました。それがアキの成長につながるのですが、ただ海に落とすのではなく、何かあったら助ける、時には一緒に飛び込む、という覚悟があるんですね。お母さんである春子さんもそう。芸能界という海に、アキと一緒に飛び込んでいった。そんなふうには、若い世代をサポートしながら、それぞれの世代がひとつになって未来へと進んでいく。そういう意識が大切だと思います。



## 座談会を終えて…

今日の座談会の感想を教えてください。

**臂さん**

常日頃から、知事は視座高く執務に当たっているんだな、と感じました。被災地における若い世代の人口の推移、といったデータを出してこられるあたり、若者のサポートを重視していることを改めて感じ安心しました。知事をはじめ先輩方に見守り、支えられながら、自分たちの世代はもっともっとがんばらなければと思います。

**下向さん**

今までの私にとって、知事は「仮想人物」でした(笑)。でも今日話してみても、知事もひとりの人間で「大人の先輩」なんだ、というイメージを持つことができました。「あまちゃん」を例えに出しながら説明してくれる知事に親しみが湧きましたし、そんな知事の岩手で活動に取り組めることがうれしいと率直に思いました。

盛岡市をはじめとする「内陸からの復興支援」について思うことは？

**臂さん**

震災後、内陸は後方支援の拠点として『県内外の

人材を被災地へとつなぐ役割』や『民間団体との連携によるきめ細やかな支援につなげてきた』という印象があります。内陸からの「被災地派遣職員」の方々も、総じて『同じ県内で起きていること』という意識が高く、冷静でありながらも情熱を持って職務にあたる姿を目のあたりになりました。ある派遣職員さんが言っていて印象に残っているのは『震災前は、内陸から沿岸に行くことはほとんどなかった』という言葉。震災後に重厚になった内陸と沿岸とのつながりが、平時の交流になっていくことを心から望みます。

**下向さん**

内陸の自治体に限らないかもしれませんが……。被害の規模、自治体としての規模が大きいところに優先的に支援に入るのは仕方がないことかもしれません。けれど小規模な自治体や、ほかに比べれば被害が小さいとみなされる地域にも、さまざまな困難や課題があり、そこに住む一人ひとりが、それぞれの課題に立ち向かいながら暮らしています。どうすることもできないことも含めた現実を見つめながら、これからもこの地で生きていく人たちがいることを慮り、その人たちが前を向き、自発的に行動して暮らしていけるような支援を引き続きお願いしたいと思っています。

三陸のうまいもんといえば、やっぱり新鮮な海産物！  
 ということで、今回は三陸自慢の海の幸を堪能できるすし屋を紹介。  
 三陸のすし屋も、食べて応援していきましょう！

「自慢の穴子寿司を味わいに  
 きて」と店主佐々木さん



## 名物のふくら穴子と地魚、日本酒が楽しめる店

### 【穴子寿司】

400円

店主の佐々木正夫さんは、浅草や気仙沼で修行を重ね、2010年に念願のお店を地元陸前高田市に開店。しかしオープンからたった5ヶ月と11日で東日本大震災が発生。店舗は津波を受けて流出してしまいました。しかし佐々木さんはすぐに店再開に向け立ち上がり、2011年12月に仮設飲食店街「大船渡屋台村」で復活。大船渡市場や気仙沼港など近海でとれた魚で新鮮な鮓や魚介料理を提供しています。

「地魚を食べてもらいたい」と地元食材にこだわる鮓ささきの看板メニューは「穴子寿司」。ふくらと炊いた煮穴子を強火でカリッと焼き上げ、香ばしく仕上げた穴子を、タレと塩でいただきます。穴子の身の甘みを引き

出すタレは、穴子の骨から出汁をとっており、仕込む度にうまみが凝縮。震災後、一から仕込み始めて約5年。店主とともに成長してきたタレは、なんともいえない深みがあります。一方で塩味は、能登産の天然塩にゆずの皮、最後に振りかけるすだちの香りが口に入れた瞬間広がります。どちらも穴子そのもののおいしさを楽しめる贅沢な逸品。そのほか、ランチで人気の「おいらのまかない丼(900円)」やお酒のつまみにも合う「おまかせコース(2,160円)」もおすすです。

2017年には大船渡駅前に常設店舗として移転予定。「これからがようやくスタート。ぜひ食べに来てもらえたら」と佐々木さんは話します。



### 鮓 季節料理 ささき

- 岩手県大船渡市大船渡町字野々田19-1A-103 大船渡屋台村
- ☎ 0192-26-3719
- 🕒 ランチ11:30~14:00、ディナー17:00~22:00
- 🗓 月曜(月祝は火曜休)

# うまいもん紀行



「高田もがんばってるのでよ  
けてらっせん」と店主阿部さん



## 人と人とのつながりに感謝、味と人情の店

### Stitch特製海鮮丼

※Stitchを見ただて注文可能

1,700円

陸前高田で創業して35年目、阿部和明さんは元気がいっぱいの名物店主。震災後は盛岡市内へ一時的に避難した時期もありましたが、「うったづぞ(立ち上がるぞ) 鶴亀!」を合言葉に、陸前高田に戻り、仮設店舗で店を再開させました。これまでの支援に感謝の気持ちを伝えたいと、ボランティアや仲よくなった人たちに感謝状を渡す活動もしているそう。「2回、3回と訪ねてくれる人も。どんどん輪が広がって広がっていけばうれしい」と話します。

今回はStitchのために「特製海鮮丼」を作ってくれました! 目がうるっとするほどわさびが効いた人気メ

ニュー「なみだ巻き」(単品200円)のほか、玉子、イカ、タコ、イクラ、サーモン、エビ、カニ、マグロ、カンパチ、とびっこなどたくさんの具が酢飯の上で輝く特製海鮮丼。魚は気仙沼、三陸産のものをメインに揃えています。そのほか「中海鮮丼(1,600円)」、「上海鮮丼(2,000円)」もおすすめ。「前沢牛のにぎり(600円)」もお客さんから好評です。

鹿島島で作られている「鶴亀鮓」ラベルの紫芋焼酎(2,500円)もお土産として人気。いつも元気な阿部さんに会いに来る人も多く、味と人情のお店です。



### 味と人情の鶴亀鮓

- 岩手県陸前高田市竹駒町字相川7-1 陸前高田未来商店街内
- ☎0192-54-2998
- 🕒11:30~22:00
- 🏠休不定休

# 振り返る

Stitchは今号で最終回を迎えます。創刊から4年半、いろんな思いや葛藤のなかで発行した19冊のStitchを読み返し、これまでの4年半を振り返りました。

2011.9



2012年6月発行

「観光」で被災地を応援しよう! という特集。「被災地を観光すること」について、アンケートも実施しました。



創刊号



7号までは、内陸に避難している被災者の方々向けの生活支援情報も掲載していました。



この事業（盛岡市復興推進広報事業）がスタートしたのは2011年5月。誌面づくりの核となる編集方針を定める時点で「何をすれば復興応援になるのか」という命題に揺れました。

いろんな意見を参考にしながら協議し「内陸と沿岸、避難者と在住者、支援することと日常への回帰。それらを『つながりあわせる』こと」を編集テーマとし、それにちなんで「Stitch」と名づけました。

誌面の中心になったのは、いつも「人」。沿岸や内陸、それぞれの場所で、立ち上がる

# 19

ありがとう4年半!

# 冊のStitchを

2016.3



2016年3月発行

4年半発行を続けたStitchも今回で最終回。「きちんと伝えなくては」  
と思うあまり原稿が進まず苦しかったけれど、Stitchを通じて多くの気づき、学びがありました。伝え方のカタチは変わっても、これからのいろいろな人の「想い」を発信していきたい、と思っています。



2014年3月発行

大穂高校の生徒さんに表紙と扉ページのモデルになってもらいました。



2015年9月発行

「わたしたちの3.11」というテーマで、内陸のみなさんに改めて当時の「想い」を振り返ってもらいました。

うとする人やそれを支える人を紹介してきました。改めて読み返すと、発行を重ねるごとに内容が変化していくのがうかがえます。2号では「まずは現地へ」とボランティアへの積極参加を呼びかけ、3号ではより参加しやすい「復興支援ツアー」を紹介。8号からは三陸に出かけ、食べることで応援する「三陸うまいもん紀行」がスタートしました。また、著名人のインタビューからも、被災地への思いが時間とともに変化していくのを感じます。

Stitchの4年半は、復興に対する「ムード」の変化の記録にもなっているのだな、と思います。取材にご協力いただいたみなさん、読者のみなさんには感謝の気持ちしかありません。4年半、本当にありがとうございました！



「ギョんにちはー!」と笑顔でお会いして、ギョギョっと!  
お魚の感動をギョいっしょさせていただくことが、うれしいです。

Stitch INTERVIEW

# さかなクン

[国立大学法人 東京海洋大学名誉博士・客員准教授]

今回は、豊富な知識に基づいた魚への愛あふれるコメントと楽しいトークで人気の「さかなクン」にインタビュー。東日本大震災で被災し、2016年春に再開する久慈市の水族館「もぐらんぴあ」の「応援団長」でもある「さかなクン」に、久慈市とのつながり、再開を目前に控えた「もぐらんぴあ」への思いなどについて伺いました。

**Q** 震災のずっと前から久慈市とつながりがあるんですね。

そうですねです！2005年から、毎年夏に「もぐらんぴあ」のみなさまが「さかなクン講演会」をギョ開催してくださっています。ですので、10年以上のありがたいつながりでギョざいます。

**Q** 東日本大震災が発生したときは心配なさったでしょうね……。そのときはどちらにいらっしやっただ

すか？

はい。3月11日は、テレビのお仕事で沖縄にいました。撮影中、東北が震源地のすごく大きな地震があったと聞いて……。テレビで信じられない光景をみてショックでした。心配になり、すぐ「もぐらんぴあ」の宇部さま<sup>※</sup>に電話してみたのですが、なかなかつながらなくて。夜の10時ぐらいにやっと連絡がとれました。

**Q** 宇部社長はなんとおっしゃっていましたか？

「自分たちは無事ですよー！」と。ほっとしました。けれど「もぐらんぴあ」がどうなったかは、その日はわからなくて……。あとで全壊したと聞いて、とてもショックでした。

**Q** 震災後、初めて久慈を訪れたのはいつでしたか？

1ヶ月後ぐらいの4月の初めてでした。毎年楽しみに通っていたもぐらんぴあの建物が、原形がわからない

ほどの姿になっていて……。悲しかったです。楽しい思い出がたくさんありましたので。

**Q** 海のすぐそばですからね……。

はい。その後、久慈市の担当者さまが「市長のところへ行きましょう」と、久慈の市役所に連れて行ってくださいました。そのとき山内隆文市長（当時）さまが「地域のみなさんに愛されている水族館だから、水槽のひとつからでも始めよう！」とおっしゃってくださいました。そのあたにかいお言葉に感動して、自分のできるがあれば、とにかく協力させていただきたい！と強く思いました。

**Q** それで、駅前の空き店舗を利用した「まちなか水族館」のオープンにつながっていくんですね。個人で飼育していた魚を何十匹も寄贈なさったと聞きました。

はい！主に地元（千葉県）館山

の海でとれて、長く家族のようにかわいがってきたお魚たちです。「もぐらんぴあ」の飼育員のみなさまが、お魚1匹1匹を大切に飼育されていることを存じていましたので、寄贈させていただきました。

❶ 大学での講義などでお忙しい

なか、復興支援の活動も精力的に行っていて、とくに久慈にはもう数えきれないぐらい足を運んでいるとうかがいました。「まちな水族館」に行くとき、さかなクンが描いたイラストがあったり、スタンプのポップのコメントからさかなクンへの感謝の思いがあふれていたり、本当に多大な支援をしてくれているんだなあ……というのを感じます。

「もぐらんぴあ」が大好きなみなさま

もとギョいっしょに、ギョ協力できましたことが、とつてもうれいでした！ 去年の暮れにも、「久慈のみなさまにクリスマスプレゼントを届けよう！」と、地元・館山の漁師さんとふ

いい関係がうかがえますね。

はい！ 久慈は山と海との距離がすギョく近くて、自然が豊かなところでギョぎいます。海産物が豊富でおいしいし、何より人がおやさしいですし、大変な状況のなかにあつても、

## 大変な状況のなかでも、

## 久慈のみなさんはいつも明るく、

## 訪れるたび「お帰りなさい」とあたたかく

## 迎えてくださるのでギョぎいます♪

いつも明るく、あたたかく接してくださいませ。久慈に行くたび「お帰りなさい」と家族のようにお迎えくださいませ。

❶ 今年4月下旬には、いよいよ「もぐらんぴあ」が5年越しの再

開をしますね。

たり、軽トラックでお魚を届けに行きました。事前に何も告げずサプライズで(笑)

❶ 水族館の方々、うれしかったですよ！ うね！ 思い立ったらすぐに会いに行ける、さかなクンと久慈の方々との

はい、いよいよでギョぎいますね！ 去年の暮れに館内を見学させていただきました。素晴らしいです！ 海はきれいでおだやかで、海産物の宝庫だけど、時には大きな津波が発生す





2月下旬にも「まちなか水族館」を訪れ、水槽にイラストを描いたさかなクン（「もぐらんぴあ・まちなか水族館」フェイスブックより）

ることも。そんな海のいろんな顔を知り、学べる水族館で、とっても貴重でギョーザいます。

**Q**魚をきれいに展示するだけじゃなく、海のすばらしさと怖さも学べる。被災した水族館だからこそ、伝えられるものがあるのかもしれないですね。オープンが楽しみです。

はい。被災された方々にとっては、海に対するやりきれない思いがあると思います。2011年の夏に、毎年お船に乗せていただいていた久慈

の漁師さんに会いに行きました。そのときお話をうかがったのですが、「津波で船は流されてしまったけれど、海を恨んではいません。海と生きていますから」とおっしゃって、感銘を受けました。どんなに大変なことになっても、海を遠ざけるのではなく、これからも共に生きて行くという思い。心から海を愛しているらしいですね。

**Q**震災から5年が経ち、もぐらんぴあもやっと再開しますが、まだ仮設住まいの方も多く、復興はまだまだと感じます。被災していない私たちができることって、なんだと思いますか？

（少し考えて）会いに行くことかな、と思います。被災した地域の方々の思い、お会いして、笑顔でお話をするのがとっても大切なことだと思います。笑顔や会話がつながると。人も自然もお魚も感動でつながれることが、一番幸せと思います！



©2016 ANAN  And Tm.

#### さかなクン

東京都出身、千葉県館山市在住。魚の豊富な知識と経験に裏付けされたトークとイラストで人気者に。2010年には絶滅したと思われていたクニマスの生息確認に貢献。海洋に関する普及・啓発活動の功績が認められ内閣総理大臣賞を受賞。2011年農水省「お魚大使」、2012年文科省「日本ユネスコ国内委員会広報大使」、2014年環境省国連生物多様性の10年委員会（UNDB-J）「地球いきもの応援団」の生物多様性リーダーも務める。2015年3月から東京海洋大学名誉博士に就任。全国各地で講演も行っている。

●テレビ出演／NHK「ニュースシブ5時（魚料理のお悩み解決!きょうのギョーザそう）」連載／朝日小学生新聞「おしえてさかなクン」など

# ～つないできた5年間～

盛岡市が行ってきた東日本大震災で被災した方々のための支援。  
この5年間の支援事業を振り返ります。



もりおか復興支援センターのスタッフが明るく優しく迎えてくれる

## もりおか復興支援センター

盛岡市は、2011年7月に東日本大震災による被災者で盛岡市内に居住する人を支援するため「もりおか復興支援センター」を開設。内陸避難者の生活支援事業として

訪問や窓口、電話での相談を受け必要な人には専門機関に引き継ぐなど細やかな見守り支援を行っています。沿岸の視察やボランティアの送り、首都圏支援と沿岸被災地ニーズとのマッチングも行っていま

す。内陸避難者向けのサークル、サロン活動も充実。市町村別のお茶っこ飲み会、囲碁将棋、折り紙や写真、カラオケ、手芸、子供向けの学習サロンなどがあり、作品の展示会も行われています。

ファイナンシャルプランナー協会や行政書士会による相談会も定期的に開催され、生活に不安を抱える人へサポートも。震災から5年が経つ現在も避難者への支援と地域交流、盛岡と被災地をつなげる活動が続けられています。

## 岩手もりおか復興ステーション

被災地と首都圏を結ぶ情報発信拠点として東京都千代田区飯田橋に2012年10月開設。ボランティア活動案内や被災地特産品紹介販売、復興情報発信、首都圏企業CSR（社会貢献）や首都圏支援団体と被災地のマッチング、被災地視察ツアー企画などを実施。2015年3月に閉所しましたが、もりおか復興支援センターで首都圏マッチングを継続しています。



東京近郊で行われるイベントで復興支援商品を出張販売して岩手をアピール

# 盛岡から支援を届けて

## もりおか復興推進しえあハート村

2012年4月に、盛岡市がシェアハウス形式の復興支援学生寮として盛岡市本宮に設置した「しえあハート村」。東日本大震災で被災し盛岡に転入してくる学生たちに無償で住居を提供。開設当初は入居学生9人で始まった学生寮もこれまでに



毎月学生たちが集まる「ごはんの会」では楽しく地域交流も

33人が入居、12人が卒業しました。2013年5月には学生寮のほか、復興支援団体やデジタルコンテンツ関連団体のシェアオフィスが集まった復興推進複合施設「もりおか復興推進しえあハート村」を発足。学生寮で毎月開催する「ご

はんの会」のほか、東日本大震災月命日にロウソクを灯して追悼する「11日の灯り」、料理部やギター部など学生や施設を利用する村民で活動する課外活動、夏祭りや文化祭も開催。2013年には「しえあハート村」を舞台にした自主制作映画「3・11メモリアルフィルム『ひとつ』」が制作されました。しえあハート放送局では村の様子も動画配信。地域とともに学生たちが安心して暮らせる場所を提供しています。

## 盛岡市かわいキャンプ

被災地へ行くボランティアを長期支援するため盛岡市が盛岡市社会福祉協議会に運営委託し、旧宮古高校川井校校舎を活用して2011年7月に開設。運用された約1年8ヶ月間、ボランティア向け宿泊機能や、ボランティアコーディネート拠点として役割を果たしていました。全国から延べ1万5千人が利用し、現在も当時のボランティアが岩手や盛岡を訪れての交流が続いています。



毎日たくさんのボランティアが訪れて、かわいキャンプを拠点に沿岸へ支援に向かった

# Re:Stitch

～読者のみなさんから～

スペースの関係上、掲載できるのはほんの一部でしたが、毎号、Stitchへたくさんのご感想、ご意見を寄せていただき、そのひとつひとつが編集部のお励みになりました。これまでたくさんのメッセージ、本当にありがとうございました。

読者のみなさんからの声を読むと勇気が出ます。もっとたくさんの人たちの今の声が聴きたいですね!

●50代男性 / 自営業 (奥州市)

はじめて手に取りました。倒木を利用して箱庭風に仕上げた表紙はまさに復興中のふるさとの景色だと感じました。ページをめくり、野田の父さんたちの心意気に感激。うまいもん紀行では地元の知らない店や食べへに行った店も載っていて親しみを覚えました。派遣で働いてくださっている職員の方々、どうかよろしく! 頑張ってくださいね!

●70代女性 / 主婦 (久慈市)

あの日をいつも思っていることは難しいけれど、Stitchのようなちょっとした機会でも振り返ることができ、とても良い機会になりました。

●60代男性 / 公務員 (盛岡市)

バラバラとめくって「年寄りたちのがんばりが若い世代の励みになればいい」という小見出しが目につきました。岩手に住む若い世代の私にできることは何なのか? 震災から月日が経った今、改めて考えるきっかけになりました。Stitchがもっとたくさんの方の手にわたり、何かを思うきっかけになることを願います。

●20代女性 / 公務員 (盛岡市)

Stitchインタビューの桜庭さんのお話はとても元気をもらいました。どうもありがとうございました。

●40代女性 / 介護福祉士 (長野県)

「新しい未来のつくりかた」とても良い特集だと思います。3・11は、とてもつらい事でしたが、それを新しい何かを見つけるキッカケと捉えて前に進む。私も見習って行きたいと思います。

●30代女性 / 主婦 (盛岡市)

遠い福岡から復興のようすを知ることができる誌面でした。知ることによって次の一歩が進めそうです。また機会があれば、Stitchと出たいです。

●40代女性 / 派遣社員 (福岡県)

「新しい未来のつくりかた」。お父さんたちの居場所。女性が集まりやすい場がありますが、男性はなかなか寄り合う場がないですね。男性ならではのものづくりの場があり、全国からも視察に訪れる人が沢山と素晴らしい活動になっているのがすごいことですね。知られざる活動を知ることができて良かったです。

●30代女性 / 主婦 (滝沢市)

今回の特集を読んで、やはりみんなのがんばりがみんなを支えていたのだと思います。力の大きさを実感しました。次回も楽しみにしています。

●10代女性 / 学生 (一関市)

初めて手に取りました。なんだか元気がもらえるレポートが載っていてうれしいですね。「うまいもん紀行」のラーメンもおいしかったです。

●50代男性 / 会社員 (神奈川県)

New  
PRIUS  
Debut!



Photo: A\*ツーンリングセレクション (E-Four).  
ボディカラーのエモーションレッド(317)はメーカーオプション。

## ハイブリッド 待望のHV4WD (E-Four)\*1 登場

日常使いにこだわったスマートなE-Four\*1にすることで、抜群の燃費とゆとりあるパッケージングを実現し、雪道などの走りも安心! 行きたい時に、行きたい場所へ、もっと行けちゃうプリウスです!!

\*1. E-Fourは、機械式4WDとは機構および性能が異なります。様々な走行状態に応じてFF(前輪駆動)走行状態から4WD(4輪駆動)走行状態まで自動的に制御し、安定した操縦性・走行の安定性および燃費の向上に寄与するものです。

■写真は合成です。雪道の走行時にはチェーンまたは冬用タイヤを装着してください。また、実際の走行時には、路面の状況に応じたタイヤの選択や、安全に配慮した運転にご留意ください。

ネット・ヨタ岩手

本社 / 盛岡市東仙北2丁目13-35 (バイパス沿い) TEL019-636-2111 代  
定休日 / 火曜日、第一月曜日 営業時間 / 9:30~18:00 ※窓口、大船渡店は異なります。

<http://www.netz-1.co.jp/>



人と人の調和を目指し  
新たなステージへ



**EP 永代印刷株式会社**

〒020-0857 岩手県盛岡市北盛岡1丁目8-30  
TEL.019-636-0011  
FAX.019-636-0099

朝日新聞 日本経済新聞 日刊スポーツ 盛岡タイムス

ご購入のお申し込みは

**ASA** 株式会社 **東北堂**

〒020-0878 岩手県盛岡市着町3番21号  
TEL 019-624-2413 FAX 019-622-3699

モデル、タレント、MC  
キャスティング  
マネージメント管理

<http://www.stockagency.jp/>

株式会社ストック



〒020-0143 岩手県盛岡市上厨川字横長根25-1  
TEL.019-648-0052 FAX.019-648-0053

盛岡のマチネタを記事にするウェブ新聞

# 盛岡経済新聞

[morioka.keizai.biz](http://morioka.keizai.biz)



[facebook.com/moriokakeizai](https://facebook.com/moriokakeizai)

# みんなの3.11

2011年3月11日14時46分。みなさんは、どこで何をしていましたか？どんなことを感じ、考えていましたか？このコーナーでは、Stitchに寄せられた「あの日の記憶」をご紹介します。



盛岡に来て3年ですが、その前は沿岸部に住んでいました。震災にあったところは初妊婦3か月でした。寒くて暗い中を2〜3日過ごしたのですが、おなかにいる子のおかげで不安はなく、がんばるぞと思いました。

●40代／女性／盛岡市／主婦



あの日は母親と自宅にいました。施設に預けている父の安否、母の体調、職場はどうなっているだろうか、まさしく津波のように何度も何度も不安が押し寄せてきました。今でも思い出すとつらくて、苦しくて、悲しいです。●40代／女性／盛岡市／パート



私の友人も陸前高田で亡くなってしまいました。本当に何度も行きましたが、まだまだ復興が進んでいないようです。いろんな形で応援していたと思います。●50代／男性／奥州市／会社員



地震のとき、仕事中にちょっと立ち寄るという予定の家族を家で待っていました。家族の身を案じたのですが、意外とすぐに「大丈夫かー？」と家に帰ってきてくれました。近くの郵便局から出発しようとしているときに地震にあったそうです。電気が止まったので信号もつかなくなったあととで聞き、すぐ帰ってこれたのは幸運だったのだなあとつくづく思いました。●50代／女／盛岡市／主婦



幸いなことに息子と夫も一緒にいました。出産を間近に控え、予定していた産院は震災の影響で受け入れられず、思いがけず岩手県の病院に入院し、それから10日後に無事に出産しました。誕生日を祝うたびに震災のことが思い出されます。これからも忘れないで大切に伝えていきたいと思います。●30代／女性／宮城県／主婦



パート先へ向かい、職場の近くを歩いているときに地震が起きました。立ってられないほどの揺れで、近くの住宅のフェンスにつかまり、耐えていました。職場ではものが散乱していました。●70代／女／盛岡市／パート

Stitchでは東日本大震災とその後の復興を「自分ごと」として考えるきっかけとして、読者のみなさんの「身近な震災体験」を誌面で共有してきました。これからも、ふとしたときにこのページを開き、「あのとき感じたこと」を思い出していただければうれしいです。たくさんのメッセージ、ありがとうございました。

♡ コープ商品

♡ 産直品

**県内13店舗!**

**COOP いわて生活協同組合**

(本部) 020-0690 滝沢市土沢220番地3  
TEL.019-687-1321代 http://www.iwate.coop/

みんながラブな  
コープ商品・産直品  
がいっぱい♡

ラブコープ  
キャンペーン  
キャラクター  
ラブコ

with smile  
築ごう未来

**かき小屋広田湾**

盛岡でも  
広田湾直送の  
新鮮なかきが味わえます。

予約ダイヤル  
**090-8784-2114**

予約ダイヤル  
**019-613-2244**

1月盛岡津志田南にオープン

**いわて三陸水産組合**

HIRO-TA BAY  
SUSHI OYSTER

岩手県陸前高田市  
小友町両替21

マップコード  
193592570

hirotawan.com

# 読者プレゼント

復興応援をしているお店や企業・団体の  
おいしい逸品やオリジナルグッズをプレゼント!  
ご意見ご感想を書いてぜひご応募ください!!

## 1 いか屋の塩辛 (150g)

3名  
名様



鮮度の良い刺身用の厚手のイカを塩だけでじっくり熟成させた無添加の塩辛です。イカ筋は漁獲時期によって脂分や味が変わるため、二度と同じ塩辛は作れません。鮮度の良いイカを仕入れることがで

きるイカの専門店だからこそつくれる味わいです。  
三陸王国宮古イカ王子: <http://www.ikaoji.jp/>

■提供 / 共和水産株式会社

## 2 陸前高田手焼きせんべいのおかきしょうゆ味

3名  
名様



昔懐かしのねこ瓶型の容器に入った、どこか懐かしいオリジナル手づくりおかきです。一口食べると香ばしいお醤油の味が口いっぱいに広がります!サクサクした食感

は子どものお菓子にも、ビールのおつまみにもぴったりな一品です。

株式会社一松商店:  
<http://www.rikuzentakata-senbei.com/>

■提供 / 株式会社一松商店

## 3 しあわせのミルクィーウェイ

3名  
名様



大人気のバター餅でイチゴソースを優しく包みました。柔らかくてミルクィーなお餅と甘酸っぱくて爽やかなイチゴソースの味わいが絶妙なバランスで

す。銀河鉄道が走るミルクィーウェイ (天の川銀河) をイメージした一口サイズの創作和菓子です。

有限会社小島製菓: <http://kojimaseika.com/>

■提供 / 有限会社小島製菓

## 4 三陸山田シーマンズ商品詰め合わせ

2名  
名様



山田町の被災事業所4社が「キリン絆プロジェクト」の一環で開発した新商品の詰め合わせです。素材を活かし、保存料や化学調味料など不

使用の安心・安全な食の提供を心掛けています。帆立・牡蠣・さんま・アカモクなどの三陸の幸を堪能できます。

■提供 / 三陸山田シーマンズ

## 応募方法

- 応募方法 / 必要事項 (希望商品、郵便番号、住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号、本誌入場場所、ご意見・ご感想) を記入の上、はがき、もしくはメールでご応募ください。
- 宛先 / 〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通1-1-21 ラヂオもりおか内「Stitch」編集部 プレゼント係
- アドレス / [stitch@morioka-fukkou.com](mailto:stitch@morioka-fukkou.com) ■応募締切 / 平成28年4月22日必着

## Stitch 設置場所

【岩手県内・盛岡】MOSS / クロステラス盛岡 / 盛岡南SCサンサ / ななっく / おでっ / アイーナ / 盛岡バスセンター / IGRいわて銀河鉄道 / もりおか歴史文化館 / 岩手県立図書館 / 盛岡市立図書館 / ジョブカフェいわてなど街中各店 / 岩手県内道の駅 / 三陸沿岸各店 【岩手県外】いわて銀河プラザ(東京) / Cafe Hi famiglia(東京) / さくらWORKS<関内>(神奈川) / 喫茶ともしび(東京) / 風の駅(京都) / OMAR BOOKS(沖縄) 他

ト  
ラ  
ッ  
ク  
は  
復  
興  
へ  
の  
力



岩手三菱ふそう自動車販売

〒020-0767 滝沢市大釜中道 38 番地 2

Tel 019-684-5152 Fax 684-4053